

# はじめに

川口 裕司 (拠点リーダー)

言語理論が言語教育に多大な影響を与えてきたことは周知の事実です。たとえば構造主義の影響を受けた1960年代のオーディオリング法をあげることができるでしょう。また情報工学の発達も言語研究に多大な貢献を行ってきました。音声認識や自然言語処理はその典型です。このように、以前から言語学と言語教育学と情報工学の緊密な関連性は認識されてきたわけですが、三学問分野の協働によって新たな学問的成果をあげてきたとは必ずしも言えません。

従来の言語研究は理論的研究や言語の内部構造の記述に終始し、実際に使用される談話やテキストを重点的に研究し始めたのはごく最近のことに過ぎません。「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」では、情報工学の成果を取り入れて、インターネット上の言語資源や既存の言語資料を分析し、言語運用の実態を科学的に解明しようと努めます。さらに、その研究成果を言語教育の現場にも応用しようと考えます。つまり、一言でいうならば、情報工学を基盤としつつ、言語学と言語教育学を「言語情報学」の名のもとに統合することで、言語理論と情報技術の十全な知識を兼ね備えた言語教育のエキスパートを養成しようというのが、この21世紀COE拠点の最大の目標なのです。この取り組みは、わが国における外国語教育の高度化にも貢献するものと考えます。

ところで2002年にCOEが採択されて、早くも3年半が経過しました。はたして、当初の目標にどれだけ近づくことができているのかを、この段階で確かめておくことは重要であると考えます。

本書では、まず最初に「言語理論と言語教育の統合は可能か」というシンポジウムを掲載しました。このテーマは、いわば私たちの目標の実現性そのものを問うています。学問分野にはそれぞれの方法論と理論があり、多少なりとも自己完結的であるがゆえに、学問分野の統合というのは容易に実現可能ではありません。そのようなことは言うまでもないことです。しかしそれでもなお統合を目指すことの真の意義は、いずれかの学問分野の閉塞的状況を打破し、より広い視野に立って、隣接領域と協働することのプラス面を思考することではないでしょうか。その結果として、両者の協働が実現すれば、それがより望ましい状態と言えるでしょう。これは個人的な意見ですが、従来の言語研究こそ、現在、そうした閉塞的状況にあるのではないかと考えます。

シンポジウムの次に研究報告を掲載しました。COE拠点に協力している院生諸氏から5名が研究論文を寄稿しています。彼らの研究意図とその方向性は、それぞれ異なっていますが、情報工学を基盤としつつ、言語学と言語教育学を「言語情報学」の名のもとに統合し、言語理論と情報技術の十全な知識を兼ね備えた言語教育の専門家を養成しようとする、このCOE拠点の目的が、彼らの研究活動に反映されていることを期待したいと思います。